

千客万来の社交都市・ロンドン 民活・地方分権(自治)で都市創生・活性化(その3) —寛容の精神と開放的な文化風土が多くの人々に活躍の舞台を提供、クリエイティブな都市へ—

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

4. 成熟都市の活性化

(1)市民の保守伝統性と革新性

人種・宗教・言語・文化が違っても、ロンドンに集う人々相互をつなぎ共有するものがある。それは共通語としての「英語」と、都市ロンドンの醸す**寛容で開放的な雰囲気**である。現在、世界で5億3千万人の人々が母語ないし公用語として英語を用いており、教育研究やビジネス等の場で普遍性の高い言語となっている。イギリスは大航海時代から近代産業社会の形成期にかけ、植民地等とイギリス連邦を形成、これらの地の支配やキリスト教の布教にあたり英語を用いたこと、また人の出入りを自由にしたこと、さらに戦後、巨大な力を有するようになったアメリカ合衆国が英語を用いていることから、英語が世界共通語として力を得るようになった。

人口(イギリスは約6,400万人)の9倍もの規模で、英語が用いられているということは、普遍性という意味で大きな力となる。また、イギリスは、その土台、下部構造として独特の土地所有制度を有し、**保守や伝統**を尊びつつも、その一方で上部構造として節々で個人が才能を発揮する**革新性**を有している。また、社会の懐が深く、異質な人々を受け入れ育てたり活躍させる、寛容さと開放性がある。

また、都市ロンドンを特徴付けるものとして、物事の**多種多様さ**と、人の**流動性**がある。この地に暮らす人々、この地を訪れる人々、それぞれに人種・民族・言語・文化は異なるが、都市ロンドンのユーザーとして、それぞれに目的をもって、この地に集い散っていく。ロンドンがそうした都市となったのは、この地の長い歴史に起因している。即ち、ケルト、ローマ、アングロ・サクソン、ノルマンなどと支配者は変わるが、その都度、接ぎ木をするようにして市民文化が複合的に形成されてきたことにある。それでは近代社会の成熟期を迎え、停滞から脱するべく活性化に向けた方策として取られた、規制改革や都市創生策について紹介しよう。

○サッチャー革命 民営化、規制緩和

イギリスは、二つの世界大戦により大きな経済的打撃を受けるまで、世界帝国としてこの世の春を謳歌してきた。第二次大戦後は、政治経済面の基調変化を受け主要産業(銀行、鉄道、電気・ガス、石炭、製鉄など)の国有化を図り、国民保険法により「ゆりかごから墓場まで」といわれる、社会福祉政策を推し進めてきた。だが、多くの社会主義国が失敗したように、官僚主義がはびこり労働組合が力を得ると労働争議が頻発、国家運営は次第に停滞、**英国病**(社会保障費負担

「地方創生」支援プロジェクト



の増大、国民の勤労意欲の低下、既得権益の発生など）といわれるような状況を呈するようになる。

しかし、文化面をみると、ロンドン世界的な**ユースカルチャー**の中心として、流行の発信拠点となっている。1960年代半ば、ミニスカートのツイギー、POPミュージックのビートルズなど、人気モデルやグループ・サウンズが出て、ファッションや音楽の分野などで世界を席卷、**外貨を稼ぎ出す**。また、1979年に首相になった鉄の女・サッチャーは、英国病を克服するべく新保守主義を掲げ、機能の低下した官僚機構の手から主要産業を切り離し民営化、さらに組織再編や規制改革の断行、所得税軽減などにより市場開放政策を推進する。

このサッチャー革命のシンボルともいえる「**金融ビッグバン**」、これは証券取引等における規制の緩和だが、あわせてドックランズにあるロンドンの港湾機能を、下流のフェリクストウ港やティンバリー港に移し、その跡地カナリー・ワーフを再開発、ここを近代建築で新たな金融街に整備、保守勢力の権化ともいべきシティと競い合う形で、ロンドンの国際金融センターとしての機能を高めていった。

・ウィンブルドン方式の導入

こうして文化・スポーツの分野だけでなく、産業・経済の分野においても、欧米のほかアフリカやアジア、中東などの新興国を含め、世界各地から続々とプレイヤーがこの地に参入、ロンドンを舞台に活躍を始める。こうして英国病が克服され、都市ロンドンの世界金融センターとしての地位は高まっていくが、英国の金融機関は続々と海外の金融機関に買収されてしまう。そうして新たに参入してきた**外国資本の活躍にリードされる形で**、イギリス経済は**活性化**していく。実際、ロンドンには米国の投資銀行やドバイなどの海外資本などが進出し、イギリスの金融機関の半分以上を駆逐してしまうが、為替市場などは世界トップの地位を維持している。

この経済活性化の手法を「ウィンブルドン方式」という。語源はテニスのウィンブルドン選手権にある。この選手権、もともとはローカルで地味なテニス大会であったが、レギュレーションを変更すると、世界中から強豪が集まる世界最高峰の大会となり活性化した。しかし、反面、開催地イギリスの選手は、勝ち上がれなくなってしまった。この現象をしてウィンブルドン方式とは、「門戸を開放し活躍の舞台を提供した結果、外来勢が優勢となり、地元勢が消沈また淘汰される」ことをいう。日本の柔道や大相撲でも、同様の現象が起こっている。

つまりサッチャー革命とは、英国病(不況で、労使紛争悪化、活力が低下し、経済は長期停滞、街も荒れる)を克服するため、停滞を続ける国内経済を市場開放政策により、外国人の手も借り活性化させる政策であった。イギリスは、自国企業が駆逐されてしまうリスクがあっても、市場の活性化を優先させた。これはケルト人→ローマ人→アングロ・サクソン人→ノルマン人と、支配層を成す民族が入れ替わり、王族が欧州各地の国々の王家と交わってきた長い歴史からみれば、この地の歴史に根ざした自然な対応である。

「地方創生」支援プロジェクト





ビートルズ



ウィンブルドンテニスコート



ドックランズ、カナリーワーフ

(2)都市クリエイティブ化戦略 地方分権(自治)

ロンドンは、広く交流する文化をアイデンティティとして持つ、寛容で開放的な都市である。こうした市民精神、クラブ型の社交都市としての文化特性を活かし、幾多ある教育・文化ストックを活用、また都市インフラの整備充実などを通じ交流基盤の強化を図ってきている。そして現在、その仕上げとして手掛けているのは、都市の**生活環境のブラッシュアップ**である。

サッチャーに続く 1997 年発足のブレア政権でも、社会の多様なニーズに応え競争力を強化するため、**民営化**だけでなく「**地方分権**」も必要として、大ロンドン市の自治権(職員の数は従前の 2 万人から政策立案・計画調整に特化し 600 人に絞る。)を復活、市長を公選とした。また、道路交通削減法を成立させ、2000 年の交通法に基づき、地方自治体に混雑税と事業所駐車場保有税を課す権限を付与した。

○混雑税の導入 都心交通円滑化、都市環境改善

都市経済を活性化させるとともに、都市住民の生活の質の向上を図るべく、ロンドンでは公選市長の下でロンドンプランを策定し戦略的に施策を展開している。その一つは、都市創生に向けた**交通需要管理政策**としての「混雑税の課金」である。ロンドンでは、高密度・複合用途開発の推進による職住近接型の都市の形成とあわせ、2003 年からは**公共交通機関を活用し都心交通の円滑化**に取り組んでいる。具体には、シティとウェストミンスター区に**乗り入れる車両**に対し、5 ポンド/日の課金を課すとともに、2007 年からは対象地区をケンジントン・チェルシー区に拡大、さらに、2008 年には課金を 8 ポンド/日に、その後 10 ポンド/日に引き上げた。これにより都心部の交通量は 3 割方減少。走行速度も 13→17km/h に 30%ほど上昇した。なお、こうして得られた税収は、バスの**増発**また**バス専用レーン**や**新規の路線整備**に活用している。

「地方創生」支援プロジェクト





大ロンドン、土地利用と高速道路網図



ロンドン混雑税・課金区域

○アーバンビレッジの整備 歩いて暮らせる、用途複合型のコミュニティ

1988年、チャールズ皇太子は「英国の未来像」というテレビ番組を制作、翌年には「英国の未来像、建築に関する考察」という著書も出版、伝統的なコミュニティ・デザインを評価し、「場所をわかまえず自己主張し都市の景観を踏みにじる、近代都市化(画一、均質、非人間尺度)⇒進歩とする動きを醜悪、凡庸、退屈と捉え、これに対抗して「都市の中に村づくり(人口4千人前後、最大800m範囲内)」が必要と主張し、10の原則(風景との調和、ヒューマンスケール、地場の素材・伝統工芸の活用、細部へのこだわり、芸術との統合、住民の関与など)を提示する。

その後、皇太子は、アーバンビレッジグループ(建築家、計画家など)を結成、英国王室は自ら所有する農場を活用し、歩いて暮らせるコンパクトなまちとして、用途複合型のコミュニティ(職住近接、多様な住宅タイプ、公共交通・歩行優先、都市の文脈の継承、建設・運営までの住民参画など)、パウンドベリーを開発する。これによりこの地の土地価格は10倍に上昇する。伝統的に不動産業を営み、デベロッパーとしての顔も持つ、王室の面目躍如といったところである。

ブレア政権は、そうした動きをふまえ1999年、政府の都市白書でアーバン・ルネッサンスに向けた主要戦略の一つとして「デザインと都市空間の質の向上」を掲げる。これをうけ策定されたミレニアム・コミュニティズ・プログラムの中に、ロンドン・グリニッチペニンシュラのミレニアム・ビレッジが、都市再生トリガー事業の一つとして位置づけられ整備が進められている。



ミレニアム・ビレッジ 小学校&コミュニティセンター(左)と共同住宅(右)

○魅力ある都市景観の形成 規制、事前の協議と評価(アセス)

もう一つの戦略的施策は、都市景観の魅力向上である。具体には、都心部の眺望景観の確保

「地方創生」支援プロジェクト



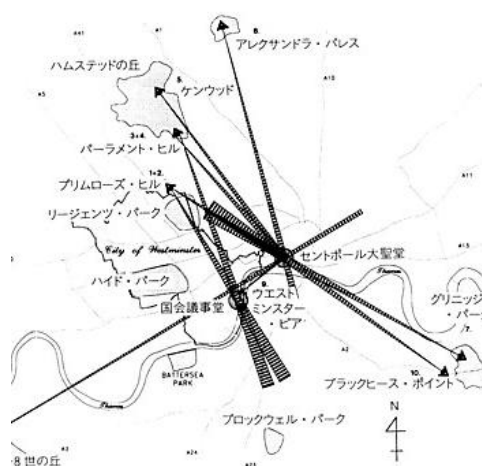
があげられる。シティのセントポール大聖堂と、国会議事堂・ビッグベンの眺望を背景景観まで含め整備しようと、そのビスタを確保するべく都心部に数 10 ヲ所視点場を設定、建築物の高さ規制や**定性的な指標の活用**も図り景観協議や景観アセスを行っている。また、ロンドンは、歴史的建造物等の景観保全だけでなく、新たな魅力ある都市景観の創生に向け、ロンドン・アイやミレニアム・ブリッジ、繭型の超高層ビル・ガーキンや欧州一高いシャードまたユニークな形態をもつシティ・ホールなど、**魅力的なデザインの建築物を続々と創出して**きている。

最近のロンドンは、金融ビジネスや教育文化の面だけでなく、交通や環境そして都市景観の面においても魅力的なまちとなっている。即ち、従来の石と煉瓦による統一感ある低中層の街並みだけでなく、所々に近代建築材料を用いアイストップとなる、魅力的なデザインの高層建物が姿を現しており、**落ち着いたシックな街並みに加え楽しく活気のあるまちへと変身**してきている。

ロンドンは、こうしてソフトとハードの両面から、都市のクリエイティブ化戦略を展開することで、他都市との差別化を図り都市個性溢れるまちになってきている。ロンドンは今や単に古い歴史のあるまちではない。経済や環境の面からも革新性・創造性を発揮し、魅力的なまちの創生に成功している。



シティ・オブ・ロンドンの景観



ロンドンの眺望景観の規制

こうしてロンドンは、教育やビジネスまた観光の面だけでなく、都市生活の面においてもその舞台を整え、人生を十二分に楽しませてくれる成熟した都市となってきている。現在のロンドンには、数々の悲喜劇を創作した 16 世紀の劇作家、シェイクスピアが言うように、人それぞれに「お気に召すまま」楽しめるまちとなっている。また、18 世紀の文壇の大御所、サムユエル・ジョンソンが、「ロンドンに飽きた人は、人生に飽きた人である。」といったように、正に飽きない状況を現出している。

そうしたロンドンの状況をふまえ 2014 年、アメリカのシンクタンクが公表した、総合的な世界都市ランキング(ビジネス・人材・文化・政治分野を対象)において、ロンドンはニューヨークに次ぐ世界第 2 位の都市として評価されている。また、森記念財団による世界都市総合ランキ

「地方創生」支援プロジェクト



ングでは、1,700 万人という海外からの訪問者（ニューヨークは 1,000 万人、東京は 700 万人）に象徴されるように、ロンドンは文化・交流、交通アクセスの部門で高評価を得て、総合第 1 位に位置するまでに復活している。

参考資料

- 歴史上の推定都市人口:ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- ロンドン:ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- 小池滋:世界の都市の物語ロンドン,(株)文芸春秋社,1992
- 小池滋:世界の歴史と文化「イギリス」,(株)新潮社,1992
- 小林章夫:ロンドン都市物語,(株)河出書房新社,199
- 見市雅俊:講談社選書メチェ「ロンドン 炎が生んだ世界都市」,(株)講談社,1999
- 小林章夫:ロンドンシティ物語,(株)東洋経済新報社,2000
- ロンドン駐在員事務所:ロンドンの都市競争力戦略-混雑税の導入を通して-,日本政策投資銀行,2005
- 編:ケン・リビングストン訳:ロンドンプラン研究会「ロンドンプラン-グレーター・ロンドンの空間開発戦略-」,都市出版(株),2005
- 岡村祐:英国ロンドンにおける眺望景観保全施策の新展開,日本建築学会大会学術講演梗概集 pp855-856,2008
- 渡邊研司:図説「ロンドン 都市と建築の歴史」,河出書房新社,2009
- 近藤和彦:岩波新書 1464「イギリス史 10 講」,(株)岩波書店,2013
- 名古屋都市センター:眺望景観の保全施策,平成 26 年度 NUC レポート No.018,名古屋都市センター,2015
- 指昭博:図説「イギリスの歴史」,河出書房新社,2015

掲載写真等

- イギリスの地形 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- ウェストミンスター宮殿 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- 1300 年頃、シティ <https://upload.wikimedia.org/wikipedia>
- 大航海時代以前の世界図 <http://www.script1.sakura.ne.jp/>
- 議会指導者クロムウェル <http://manapedia.jp/>
- ジェニー紡織機 <http://tamatanikki.sblo.jp/>
- 大航海時代の船団 <http://blogs.yahoo.co.jp/>
- 17 世紀のグローブ座復元 <http://www.japanjournals.com/>
- ロンドン大火 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
- 19 世紀ロンドンの市街地の拡大 ヒュー・クラウト編「ロンドン歴史地図」 <http://www.ichiura.co.jp/>
- 近世風の街並み(道の中央に排水溝) <http://media-cdn.tripadvisor.com/>
- 大ロンドン計画 <http://toshil.civil.saga-u.ac.jp/>

「地方創生」支援プロジェクト



ハイドパーク <http://smartrip.jp/> <http://taptrip.jp/>
アスコット競馬場 <http://mobell.hatenablog.com/>
ロンドン地下鉄網図 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
ロンドン地下鉄・チューブ <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
ピカデリーサーカス <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/>
近世イギリス、コーヒーハウス <http://yamatake19.exblog.jp/>
ビートルズ <https://www.bing.com/>
ウィンブルドンテニスコート <http://image.search.yahoo.co.jp/>
ドックランズ、カナリーワーフ <http://london.navi.com/>
大ロンドン、土地利用と高速道路網図 <http://blog.goo.ne.jp/>
ロンドン混雑税・課金区域 <http://www.kankyo.metro.tokyo.jp/>
ミレニアム・ビレッジ 小学校&コミュニティセンター
<https://www.machinami.or.jp/>
共同住宅 <http://kinoie-saijou.seesaa.net/>
シティ・オブ・ロンドンの景観 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>
ロンドンの眺望景観の規制 City of Westminster 1994

「地方創生」支援プロジェクト

